

PICK UP

# 平野啓一郎 三島由紀夫論

新潮社 / 3740円

平野啓一郎

ひらの・けいいちろう 1975年  
愛知県生れ。京都大学法学部卒。  
1999年、大学在学中に『日蝕』  
で芥川賞受賞。著書に『マチネ  
の終わり』『ある男』『本心』等。

## Bookwormの 読書万巻

# その人生と作品を読み解き かくも優れた変奏が生み出された！

評者  
**西川 賢**  
政治学者・津田塾大学教授

45年しか生きなかつた作家・

三島由紀夫になぜ人は惹かれるのか。もとより評者など、作家でもなければ文学を専門とする研究家でもない。一介のディレッタントとして三島に魅せられ、作品を読み込んできた。

評者が三島に惹かれるのは、三島が遺したテキストの背後に重大なメッセージが秘教主義的な形で隠されているように感じられ、それを解明することできだが、それが生まれる時代、ひいては日本という国を理解するヒントが得られる気がするからである。この営みは、いわば相対化された形での「自己理解の試み」である。

二十有余年を費やして言葉を

継ぎ足しつつこの大作を書き上げた平野氏も、三島の秘教的メッセージを読み解く誘惑に駆られた一人であろう。平野氏は三島の作品読解を通じて何を語ろうとするのか。評者の見

ところ、平野氏が三島に仮託して試みるのは、戦前・戦後の日本社会に生じた「断層」について考究すること、いわば「昭和時代の歴史的相対化」である。

本書において、平野氏は三島の文学作品の中から四作品を対象に選び、明示した基準を外的に取扱う。本書において、著者は三島のセクシュアリティに踏み込む。あくまでそれは作品を内在的に読み解ぐために作家の実存に迫ることに当てはめて価値づけを行う。「文学作品に対する内在的批評」

という王道的手法により、平野氏が展観する三島の文学世界は

深甚・複雑かつ絢爛華麗なもので、三島の実存的孤独に基づいて生み出された作品群が彼の天才によるものであることを再度確信した。安易な読解・理解を許容しない孤高の芸術たる点において、三島文学は文学の一つの理想を達成している。

評者は平野氏の対象との距離の取り方に好感を抱く。本書において、著者は三島のセクシュアリティに踏み込む。あくまでそれは作品を内在的に読み解ぐためには、嫉妬さえ感じてしまう程度である。

索や憶測を行う暴露的なものではない。さりとて、著者は三島を無暗に賛美することもなく、「生き残ってしまったものの苦悩」が三島の戦争理解を歪めていると指摘したり、「自由な創造主体たる日本文化」に対する理解に看過しえない論理の飛躍が見られる点を指摘したりするなど、三島の矛盾や限界に言及することを忘れない。しかし、それは決して三島に対する皮相な悪口ではなく、三島自身の思想と行動を拘束していた「昭和」という時代固有のエピステマームへの批判と解すべきである。

三島由紀夫の人生と作品について、かくも優れた変奏が新たに生み出された。同い年の評者としては、嫉妬さえ感じてしま

にしかわ・まさる

1975年兵庫県生れ。慶應義塾大学大学院法学研究科修了。博士(法学)。専門は比較政治・アメリカ政治論。主著に『分極化するアメリカとその起源』『ビル・クリントン』など。